

聞名仏教

第 189 号 毎月発行
(発行日) 2026 年 6 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号・番号 17810-7-259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

他力の救い 佐々木蓮磨

親鸞聖人の教えでは、つねに他

力ということが説かれています。

しかし、その他力の真意が一般に

よく了解されていないために、い

ろいろに誤解されていることは、

まことに遺憾にたえません。例え

ば「他力本願」ということばでも、

一般には依存主義のように誤解さ

れて「他力本願は悪い」とか「他

力本願ではダメだ」とかいうこと

が世間通用語のように用いられた

り、「往生」という言葉でも現在と

切りはなして未来だけの救いのよ

うに考えられたりしていることで

す。

むかし、香樹院師に一生ついて

聴聞した僧侶に、丘誓堅という人

がありました。この人が最後に述

懐して言われるには「自分は寺を

すてて、一生涯香樹院について聴

聞したが、今になってみると、何

も得るところはなかった。ただ無

理な生活をして病気を得たのみで

あったが、ありがたいことには生

々世々の初事に〈他力〉というこ

とを知らせてもらった。これ一つ

が、人間に生まれ出た所詮であつ

た」と。

この述懐には、深々の意味が含

まれています。「他力」の意味が、

一生涯かかってやっとわかり、し

かも、その「他力」を知ったこと

に、人間としての生き甲斐を感じ

たというのですから、普通一般に

考えられている「他力」とは、よ

ほど意味が違うわけです。一般に

考えられている「他力」は、自分

とはなれている「他力」ですが、

親鸞聖人の「他力」は回向される

他力で、清沢満之師が「自力も他

力のおあたえ」と言われたように、

私の自力も、他力のなさしめであ

つたと目を醒まさせていただくこ

とです。

たとえば、今まで手先きで文字

を書いていると思っていたところ、

よく考えてみれば手先きでなく私

が書いていたのであつたと気がつ

いたようなものでしょう。少し難

かしい言葉を使えば、個我が絶対

に撰取還元されるとも言えるの

です。わかり易く言えば、今まで

自分の力で生活している、と考え

ていたものが、教えを聞くことに

よって、自分には何らの力はなか

つた。全く他力のなさしめであつ

たと知って、謙虚な態度で感謝の

生活に出ることです。

仏教は無我を説く教えであって、

その説き方は各宗派によっている

いろに違っておりますが、親鸞聖

人の教えは、初めから「我」を捨

てさせようとするのではなく、偉大

なる如来——絶対者の本願力と威

神力を説き、その力の前に、おの

ずから我執が消されて行くという

行き方があります。したがってむ

ずかしい修行をするのでもなく、

また理屈を弁えるのでもありません。毎日の生活の中で常に教えを聞いて行くのみで、おのずから仏教の極致である「無我」の境に入ることができるのであります。

ややもすると、真宗で説く阿弥

陀仏や法蔵菩薩を、神話や寓話の

如くに軽く考えられる傾向があり

ますが、それは他力教の真意とい

うものがよく了解されていないの

です。阿弥陀仏にしましても、法

蔵菩薩にしましても、単なる寓話

でなく、人間の自力執心を捨てさ

せる偉大なる仏の善巧であること

を知らねばなりません。根本精神

を忘れて枝葉の言葉や、話を捉え

ると大変な間違いに陥ります。

他力の教えを聞いて「われ生く

るにあらず、生かされているなり」

「われ死ぬにあらず、引き取られ

るなり」と言った生活態度になり

ますと、現在の生活問題も安心で

ますが、死後の問題も心配する必要

はありません。ひたすらに広大な

他力を仰ぎながら、日々を感謝で

暮らさせてもらうのみです。(了)

ではなく、「信じる」ことがそのまま如来のはたらきである」ということでありましよう。

清沢先生はここで信じる自己と信じられる如来、あるいは自己と知られる如来とは初めから離れがたく一つであるということを「信ずる信心と信じられる如来との二つの事柄が、全く一つのこと」だといわれるのです。こういう目覚めが信心の内容でありましよう。

もう少し詳しく申し上げますと、私が信じたらひつついてくる如来なら、ひつついているのですからまた離れることもありません。はじめから一つである如来は私がどっちへどうころんでも離れない。これに気がつくか気がつかないかだけです。気がつくのが信心です。

このことに気がつかないと、阿弥陀仏を離れてものを考え、行動し、この世の物（財産や健康や仕事や名声など）を当てにしすぎ、支えにし、深く執着し、壊れるのを恐れ、まったく「不

透明な無」の中に死んでいく。そういう自我中心の生き方に終わってしまいます。

実は私ははかりなきいのちの中に初めからいて、今もいて、これからもある。しかもこのいのちは単なる物質的なはたらきだけではなく、あたたかい慈悲の心（はたらき）を含んでいます。

このことは称えている念仏のお声が「ここにいます、お前の主としてここにいます。引き受けている」の大慈大悲の仰せとして聞かされるところに、ほのかであつても知らされるのであります。

『私の信念とはどんなことであるか、如来を信ずることである。私の云う所の如来とはどんなものであるか、私の信ずる所の本体である。』

先ほどの事の繰り返しですが、これを伝統的な真宗の説き方（宗学）でいいますと、如来の大悲心が凡心に回向成就したのが信心であるということです。

如来の仏心が凡夫の心に届いて離れがたく一つになっている信心。天井の月の光（仏心）が池（凡心）に届いて月影が池に映るようなものだといわれます。仏心の外に信心は無いということ。

他力の信心とは、凡心に仏心が離れなくなったのが信心で、信心の中身は仏心です。仏心を信じる信心と仏心とは一体であつて二つでは無い。この信心のすがたを教義的に「機法一体」ともいわれます。これは信じる機と信ぜられる法が不二体である信心という意味です。

ただ信じる信心と信じられる如来とは一体であるが、しかしそこに区別がありません。逆にできない順序があります。

信心を押さえてみれば阿弥陀仏のお心であり、阿弥陀仏を知るところに信心があります。しかし阿弥陀仏がなければ信心は全く成立しません。人に信心が無くても阿弥陀仏のはたらきは

厳然としてまします。阿弥陀仏のはたらきがあつて信心が人に起こるけれども、先に信心があるから阿弥陀仏がましますとはいえませんが。阿弥陀仏のはたらきが始まるのですから、この関係は逆にはなりません。

そういう意味からは信心と阿弥陀仏は同じではありません。信心は阿弥陀仏のはたらきが無限な人の上に現れ出た相であり、阿弥陀仏のはたらきの人における反映だといえます。先ほどの月と池に映った光による月影の違いです。

阿弥陀仏の本願のはたらきは万人に平等にはたらいていますが、それに気がつく信心は一人一人のものであつて、私が信心を頂いたからといって自分の子供も信心を頂いたとはいえませんが。それを「往生は、一人一人のしのぎなり。一人一人に仏法を信じて後生をたすかることなり。」（蓮如上人御一代記聞書）より）といわれています。

『分けて云えば、能信と所信との別があるとでも申しましようか、即ち、私の能信は信念でありて、私の所信は如来である、と申して置きましよう。或は之を、信ずる機と信ぜらるる法との区別である、と申してよろしい。然し、能所だの機法だのと云う様な名目を担ぎ出すと、却て分かることが分からなくなる恐れがあるから、そんなことは一切省いて置きます。』

といわれ、以上のことを伝統的な真宗の宗学でいえば、能信（信じる心）と信じられる所信（仏心）は一体不離だといわれるのです。信じる人のことを「機」といい、信じられ如来を「法」と言いならわしています。ですので能信の機と所信の法といい、能信の機と所信の法とが一体です。

しかし先生は、能信・所信などということを詮索すると複雑になりかえって分かりにくくなるから省くといわれます。

信心夜話

真宗では、あるいは真宗人は「なぜ念仏を称えるのか」という極めて基本的なことを先日問われました。

このような問いは初歩のことで、今更問う必要はないのでないかといわれそうですが、案外、真宗の教えの基礎となるこの点が不透明な場合が多いのです。それについて、肝要なところを極く簡単に述べたいと思います。

浄土真宗の教えとは「本願を信じ念仏もうさば佛になる」と『歎異抄』に端的に説かれています。ではこの場合、本願とは何かと申しますと、『佛説無量寿経』に説かれている四十八願の中の第十八願のことで、この本願のはたらきによって一切衆生が救われると説かれているのです。それでこの願文は、

「たとひわれ仏を得たらんに、

十方の衆生、至心に信樂し、わが国に生ぜん^{おも}と欲ひて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺^{しょうがく}を取らじ。ただ五逆と誹謗^{ひぼう}正法とをば除く。」

です。

ただ、この願文を多くのインド・中国の高僧方が読みましたが、この願が一切衆生を救うところの阿弥陀仏の誓願であると読んだお方はなかなかいませんでした。しかるに中国の唐の時代に出られた善導大師はこの第十八願の本意はこれであると、十八願を解釈されました。それは

もし我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること、下十声に至るまで、もし生まれずは正覺を取らじと。

と読まれました。そして、五百年ほどしてこの願に驚嘆しこの願こそ私の救いであると受け取られた日本の法然聖人は、この願をただ単純に信じて念仏申すばかりで浄土に生まれることができる^{と極めて}シンプルに人びとに分け隔て無く説かれました。そしてこ

のように解釈された願を「念仏往生の願」といわれました。ここに初めて第十八願が一切衆生を浄土に生まれさせて下さる願であることが証しされたのです。

この念仏往生の願は「我が名号を称すること、下十声に至るまで、もし生まれずは正覺を取らじ」という阿弥陀仏の誓いですが、「たった十声なりとも（一声なりとも）、口先で称えるばかりで、浄土に必ず生まれさせる」というこの誓いによって「もし生まれずは正覺を取らじ」と、阿弥陀仏の前身である法蔵菩薩は我が身のいのちをかけた誓いを永き修行によって成就されました。それゆえ、この願はすでに成就して法蔵菩薩は阿弥陀仏になって今現にはたらいておられ、「我が名を十声一声なりとも称えるばかりで助ける」という無条件に救いたもうはたらきを私たちに南無阿弥陀仏と告げ知らせ続けてくださっています。

この法然聖人の説法から日本に本願浄土教が開かれてきたのであり、この法然のお心をさらに明らかにされたのが

お弟子の親鸞聖人でした。こうして、「お念仏を称える」とこゝとが勧められ、称える念仏の一声において絶対的な大悲の救いを受け入れる信心が往生の正因であることを宗祖は強調されたのであります。ですから古来から、まずお念仏が勧められ、お念仏を称える。そこにお念仏の声がおのずから耳に聞こえてきます。自らの耳に聞こえてくるお念仏の一声において「ひと声となえて往生す」（宗祖・ご消息）の仰せを聞き、「ああこのままなりで助けて下さる、ああ有り難い」と受け取る信心で浄土往生が不思議にも決定するのです。なぜならこのように受け取る時、はからずも阿弥陀仏の撰取のいのちにであり、阿弥陀仏と離れない身になるからです。

住職雑感

高校一年生の始め、クラシックに興味を持ち、「トルコ行進曲」とか「アルルの女」などの、聴いてすぐ美しいと分かる曲を最初は聴いていた。しかし、名曲と言われているのも聴きたいと思ひ、名曲の代表の

ように言われていたベートーベンの「運命」を、高校生にとっては高額の物を買い、小さなプレイヤーで聴き始めた。二回・三回と聞いてみたがさっぱり良いとは思えない。四回・五回と聴いても感動がない。なぜこれが名曲なのか分らない。とうとう「大金をはいたが損をした、悔しい」とまで思うようになった。しかし、我慢して、八回・九回と聴いて十回目に非常に感動して、「なるほど名曲と言われるわけだ」と納得した経験がある。その後いろいろ名曲を次々と聴くようになり、聴く耳ができたのか、いろんな曲を楽しむようになった。仏教も同じで、仏教の教えを聴いて、「よく分からない」「つまらない」という人が結構いる。それで「もう聴くのは止めた」となって、聴かなくなる人も少なからずいる。しかし、「今の私には分からないけれど、仏教の教えは大事なことを説いているのではないかと、辛抱して聞き続けていると、「ああそうか。なるほど深い真理であり、阿弥陀仏のお心はなんと大悲に満ちているのだろうか」と感じる時が来る。仏教に縁があつても「聴いてもつまらない」から止めるか、「今は分からないがきっと深い有り難い真実があるに違いない」と聞き続けるかで分れてくるように思われる。